

トークセッション「地域で近代化遺産をどう活かすか」

コメンテーター 産業考古学会会長・日本大学理学部上席研究員 伊東 孝
 パネリスト 工学院大学建築学部建築デザイン学科 客員研究員 二村 悟
 愛媛大学教育学部教授・副学長 曲田 清維
 コーディネーター兼パネリスト
 (公財)えひめ地域政策研究センター
 近代化遺産主任調査員 岡崎 直司

○岡崎 皆さん、こんにちは。前段で伊東先生の分かりやすい基調講演を頂戴いたしましたので、これから私のほうで各先生方にご協力いただきながら、もう少し細部にわたった各分野のお話をお聞かせいただくかなと思っております。これをうまく進められるかどうかは、私の頭の中の7、8割は内容よりも時間ということで、かなり鬼の岡崎にならなければいけないのかとドキドキしておりますけれども、いずれにしましても4時20分までお付き合いいただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

先ほど、ご紹介いただきましたけれども、本当にいい本を出版できまして、この本は本当にいい本なんです。これを日本語で何と言うかという、“て・ま・え・み・そ”というわけです。しょうもない始まり方をしておりますが、各分野多岐にわたるものが近代化遺産というものでありますから、まずはメインであります産業遺産というものについて、概括を二村先生から15分ばかりお話いただきたいと思っております。よろしく願いいたします。

○二村 よろしく願いいたします。産業遺産分野における総括ということで、私が担当している箇所が中心になってしまいますけれども、全体像を少しお話したいと思います。

まず、これは私が見たものの中でこの10年間に取り壊された例です。いずれも素晴らしい近代化遺産ですね。煮干しイワシ製造施設は執筆中に壊されてしまいました。そして、倉敷紡績株式会社北条工場は執筆後に取り壊されてしまいました。環境とかエネルギーを考えると、活かすことに工夫とか知恵は必要ですけれども、既存のものを解体して新築するというよりは、既存のものを活かすことのほうが環境エネルギー消費という部分でも経済的にも本当は優しいはず。東日本大震災以降、既存の住宅に対する耐震技術も著しく向上しておりますけれども、

使い続ける数を増やすことで、維持管理に注いでいく知恵や工夫もどんどん技術革新していこうと思っております。これは結果として経済的な効率も上げていこうと思っております。

総括ということですが、幅広い範囲ですのでも、若く見にくいのはご了承くださいと思います。従来の建築史というのは、先ほど伊東先生の用・強・美という話がありましたけれども、もっと大雑把に言って意匠や伝統的な建築技術に優れたものが価値を認められてきたわけです。例えば、社寺仏閣、民家、洋風建築です。産業関係の建築、特に生産の場となった工場や付属屋というのは、意匠や伝統的な建築技術の面では劣るものが多いですから、これまでまともには触れられて来なかった。基本的に建築史としての研究対象ではなかった。けれども、産業が評価されるべきというのは、伊東先生の話の中にもありましたけれども、意匠や建築技術ではなくて、各産業において生産施設としてどういう近代化を歩んできたかという証しがどれだけ建築物に残されているかを見る必要があります。そういうわけで少しずつ価値として認められてきています。本当はこの辺を詳しくご説明したいのですが、時間がないのでどんどん進めたいと思っております。

産業分野というのは、とにかく幅広くて、今回は多岐に渡る分野の業態を集めようというところで物件の選定が行われてきました。ここに出ているような、人々の生活に欠くことのできない、生きてきた証しといえますか、それによって生まれる景観も含めて、人工的な基盤ですから当然近代化の痕跡を持っている。ただ、ここでお伝えしていきたいのは、物件選定において力を入れていくわけですが、例えば近代化遺産報告書に載っていないということで、それをアリバイにして壊す人がいる